

西はりま天文台による福祉施設での天体観望会

Organizing Star Gazing Programs at Welfare Facilities

高橋 隼¹ 尾崎勝彦² 伊藤洋一¹

TAKAHASHI Jun¹, OSAKI Katsuhiko², ITOH Youichi¹

1 兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 天文科学センター 2 マリアホスピスボランティア

1 Center for Astronomy, University of Hyogo

2 Hospice astronomical volunteer for St. Mary's Hospital

[要約]天文学による地域福祉への貢献に向けた試みとして、2014年3月に、西はりま天文台の地元・兵庫県佐用町にある2つの福祉施設において天体観望会を行った。観望会開催について、次のような期待があった。1)天体観望という人々の関心の高いイベントを利用しての福祉施設と近隣地域の交流の可能性。2)星を眺め、壮大な宇宙に思いを馳せるという非日常の体験による施設利用者や職員のストレス緩和や知的好奇心喚起の可能性。実際3月5日の観望会において、施設近隣居住者の飛び入り参加があり、観望会が福祉施設と近隣地域の交流の一助になったことが認められた。

[キーワード] 観望会, 福祉施設, 障がい者, 地域交流

1.背景:筆者らはこれまで健常者を対象とした観望会において、観望会後に気分状態が改善されることを見出した。さらに2007年よりホスピス病棟で観望会を開催しており、それらの知見・経験を元に今回、地元の福祉施設において観望会を開催した。

2.グループホームでの天体観望会:「グループホームコスモス」において2014年3月5日18:00~19:00に開催した。同所は障がいのある人たちが、サポートを受けながら暮らしている場所である。20cm反射望遠鏡、8cmおよび7.7cm屈折望遠鏡を用い、月、木星、シリウス、ベテルギウス、オリオン大星雲、すばるを観望した。スタッフは高橋、尾崎他西はりま天文台研究員および学生の5名であった。参加者は同所利用者、職員、近隣住民等約30名であった。参加者からは多くの感嘆の声が聞かれ、質問や会話も盛んに行われた。器材設置中にも子どもを含む住民が集まってきた。望遠鏡を覗くことが難しい参加者を想定し、スクリーン投影も準備していたが、小雨のため実施しなかった。幸い覗くことが身体的に不自由な参加者は見受けられなかった。しかし、一部アイピースを覗くことに不慣れな様子や「遠慮」して覗かない参加者も見受けられた。

3.作業所での太陽観望会:「はなさきむら作業所」において2014年3月22日13:00~14:30に開催した。同所は障がい者が通い、労働を含む様々な活動を行う場所である。この観望会は同作業所が開催している余暇支援プログラムとして位置づけられた。スタッフはこの回は、西はりま天文台友の会会員、兵庫県立大学看護学生等が加わり、8名であった。参加者は同作業所利用者40名程度、職員5名であった。簡易分光器による室内での蛍光灯観察、戸外での空

の観察に続き、太陽観望を行った。器材は、H α フィルター付屈折望遠鏡、太陽投影板付8cm屈折望遠鏡、太陽フィルター付7.7cm屈折望遠鏡であった。H α フィルター付の望遠鏡にはビデオカメラ(Watec社WAT-231S2)も取り付け、スクリーン投影も行った。ほとんどの参加者がアイピースを通して観察できたものの、うまく覗けなかった参加者も数名いた。太陽投影板による観察では、黒点の仕組みや太陽までの距離など突っ込んだ質問もなされた。これは、同時に多人数で観察できることにより、コミュニケーションが促進されたものと考えられる。また、スタッフに看護学生が含まれていたことも特筆すべきであり、病院内でのニーズについての情報も得られ、今後の活動の展開につながる可能性が見出された。スクリーン投影はアイピースを覗きにくい人にとっては有効であるが、日中戸外では、明るすぎて見にくい、風で倒れるなどの問題点が明らかになった。

4.成果と課題:3月5日の観望会では、地域住民の参加が得られたことは大きな成果であろう。グループホームコスモスの地域に根付いた活動が前提になっての結果であろうが、今回の観望会が交流の一助になったことは十分に認められる。アイピースやスクリーンの問題、参加者の負担にならないプログラム、参加者のストレス緩和等の定量指標が今後の検討課題である。

なお、本プログラムは兵庫県立大学が実施する「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の一環として行われた。最後に2回の観望会を受け入れていただいた「社会福祉法人はなさきむら」の利用者・職員の皆様に深く感謝申し上げます。